

♪ 2022年度 **poco a poco** ♪

Nr. 12 2022年9月21日(水)

文責:プファイル・辰巳

お帰りなさい 6年生！

いってらっしゃい 中学2年生！

先週は小学部6年生の修学旅行、そして来週は中学部2年生の修学旅行。その間に中学部の中間テストやぶどう摘みもあり、9月は飛ばすように過ぎていきますね。また、夏の暑さがウソのような朝夕の冷え込みです。季節の変わり目、体調管理に気をつけたいものです。日本の台風被害、ウクライナで続く戦争、英国クイーンの埋葬など、暗いニュースは後を絶ちませんが、学校では子どもたちの明るい歌声が響いてきて、励まされます。これから寒く暗くなる季節も、元気に乗り切りましょう！



音楽こぼれ話 <その時、作曲家は… ⑩ ジャコモ・プッチーニ
オペラ「マダム・バタフライ(蝶々夫人)」>

ボーデン湖はドイツ、スイス、オーストリアの三国にまたがる湖ですが、そのオーストリアの湖畔の町、ブレゲンツの湖上オペラをご存知でしょうか。夏の野外オペラとしては、ヴェローナの円形劇場に次ぐ大規模な舞台です。しかも舞台が湖水の上に設営され、波の音を聴きながらのオペラ鑑賞となります。今年2022年度の演目は、プッチーニのオペラ「蝶々夫人」でした。テレビ放映もあったので、ご覧になった方もいるかと思いますが、「蝶々夫人」は、日本の長崎で繰り広げられるアメリカ海軍兵士ピンカートンと没落藩士令嬢の蝶々さんとの悲しい恋物語です。

1858年、イタリアのトスカナ地方ルッカで、宗教音楽家の家系に生まれたジャコモ・プッチーニ。最初は教会オルガニストとして音楽家の道を歩み始めましたが、同じイタリアの作曲家ヴェルディのオペラ「アイダ」に感激し、オペラ作曲家に転向するこ

とを決めたといひます。24歳でオペラの作曲に着手し、3作目の「マノン・レスコー」で脚光を浴びた時は35歳になっていました。その後「ラ・ボエーム」(1896年)「トスカ」(1900年)と傑作を生み出したプッチーニは、音楽家として脂の乗り切った時期を迎えます。

そして「トスカ」の発表後、次なる作品の題材を探していました。その頃「トスカ」が英国でも上演されることになり、プッチーニはロンドンに招かれました。そこで英語の戯曲「蝶々夫人」を観劇する機会に恵まれたプッチーニは、その異国情緒あふれる作品に感激し、次の題材にしたいと思ったそうです。

ミラノに戻ったプッチーニは、オペラ制作の準備を精力的に始めます。台本執筆の依頼、日本の伝統音楽や風俗習慣、宗教的儀式などに関する資料を収集し、楽譜やレコードなども入手しました。当時のイタリア駐在の日本人外交官夫人に面会したり、日本人女優のミラノ公演に足を運んだりもしました。

こうして作曲を進めていた1903年2月、プッチーニは自動車事故で重傷を負い、しばらく身動きもできない状態になりました。春ごろからは車椅子生活が始まりましたが、その状態でも作曲を続け、ついに12月に脱稿しました。しかし、翌1904年2月にミラノ・スカラ座で初演された時は、第2幕が長すぎた上に、日本情緒が濃すぎたために観客から不評を買い、成功とは言い難い結果に終わりました。



この結果にひどく落胆したプッチーニでしたが、それに負けることなく、すぐさま改訂に取りかかり、3ヶ月後にはブレシアという町で公演し、大成功を収めたそうです。その後も改訂を重ね、現在は1906年にパリで公演された第6改訂版で上演されているそうです。

日本のメロディが随所に現れ、異国情緒も醸し出しながら、プッチーニらしい叙情的で美しいメロディで全編を盛り上げ、恋に破れた蝶々さんの自害で終わる悲話に仕上げられています。蝶々さんが歌うアリア「ある晴れた日に」は特に有名ですね。

欧米で演じられる「蝶々夫人」の舞台演出や衣装を日本人が見ると、違和感をもつ場合もありますが、最近では「日本文化や日本人のしぐさなどをよく研究しているなあ。」と感心させられる場面もあり、興味深いです。

